

3 . 近代日本文学と近代化 - 翻訳文化 -

1 . 現代的な意味における文学の成立、その社会的背景

二つの意味の文学：Letter と Literature

19世紀、近代

イーグルトン

「現在、文学というと、「創造的」な文学表現もしくは「想像的」な文学表現を指すのがふつうだが、十八世紀の英国では、文学はそのようなものに限定されなかった。当時において文学とは、社会の中でその価値を認められた文学表現の総体の謂だった。すなわち、哲学、歴史、随筆、書簡、そしていうまでもなく詩。一つのテキストを「文学的」たらしめる決め手となったのは、それが虚構性をそなえているかでなく - そもそも十八世紀の段階では、小説という成り上がり者を文学として認定することじたいが疑問視された - そうではなく、それが「高尚な文学」(polite letters)として必要な条件を備えているかどうかであった。別の言い方をすると、文学の認定基準はあからさまにイデオロギー的なものだったのだ。」(29頁)

「文学に関するもろもろの定義が現在のようなかたちをとりはじめたのは、実のところ、「ロマン主義の時代」以降のことだ。「文学」という言葉の中に現代的な意味が発生したのは十九世紀なのだと言ってもよい。こうした言葉の意味で使われる文学とは、だから歴史的にみればごく最近の現象ということになる。」(30頁)

「十九世紀後半に生じた文学的事件とは、英文学研究の発達である。その原因は何かと問われてもむづかしいのだが、ただこれだけはまず間違いないと思われるものが一つある - 「宗教の破綻」である。ヴィクトリア朝時代も中頃をすぎると、この宗教というこれまで長い間精神的よりどころとされた巨大かつ強力なイデオロギー形式に翳りがみえはじめた。もはやかつてのように大衆の心と精神をつかむことができないまま、科学上の発見と社会変化の二つになさみうちされて、いままで自明のこととされていた宗教の支配力が、いまここに霧散せんとする危機をむかえたのである。これはヴィクトリア朝の支配階級にとってゆゆしき問題だった。なぜなら、どのような理由からでも、宗教ほどイデオロギー支配に適する形式はほかにないからである。成功したイデオロギーがみなそうであるように、宗教もまた、明晰な概念とか論理的原則にもとづくことなく、象徴、慣習、儀礼、神話といったものによってはたらきかける。それは、情緒的なもの、経験的なものであって、人間の心の奥底にある無意識の領域にしっかりと根をおろす。」(37頁)

「宗教の伝える究極的真理とは、文学的象徴によって媒介される真理を同じように、合理的論証をよせつけぬものであって、それによって自らの主義主張が絶対であることを強調する。そして忘れてはならないのは、宗教は、少なくともヴィクトリア朝時代においては、平和促進効果そのものであったことだ。宗教は、従順な精神、自己犠牲の精神、それに瞑想的内向的な生活態度をはぐくむ。こう考えてみれば、この宗教というイデオロギー

の迫りくる解体を前にして、ヴィクトリア朝の支配階級が危機感をつのらせたのは当然のことだと納得できる。」(38頁)

「ただ幸いなことに、宗教にかわる、しかも宗教におどろくほどよく似た言説が手近にあった - 英文学である。オックスフォード大学の初期の英文学教授ジョージ・ゴードンは、教授就任講演の中で次のような発言をおこなった。「英国は病んでおり……英文学がこれを救わねばなりません。……」」(38頁)

「当時、危急の社会的課題であったのは、アーノルドが正しく認識していたように、功利重視の中産階級を「古典化する」こと、すなわち、教養を身につけさせることだった。」
「こうした策略の利点はなんとといっても、労働者階級を効果的に統制支配し懐柔できる点にあった。」(39頁)

2. 欧米文学の翻訳

以上のように成立した19世紀の英文学(国民文学)が、翻訳を通して明治期以降の日本に紹介された。世界文学全集の企画、岩波文庫。そこには、イーグルトンが指摘したのと同様の意味があった(宗教と文学の社会的心理的機能における類似性)。

西欧化・近代化における古典の形成 教養文化の成立。

3. 聖書の翻訳

中国語訳聖書

キリシタン文献

ヘボン・ブラウン訳(1872-)

明治委員改訳聖書

大正改訳(文語訳 1910-17)

口語訳(日本聖書協会 1954/55)

共同訳聖書(新約聖書のみ 1978)

新共同訳聖書(1987)

その他に、カトリック教会や正教会などにおける訳や個人訳(関根正雄訳など)、一般書店企画訳(最近の岩波書店訳など)などが存在する。

4. 近代日本文学とキリスト教

『近代日本キリスト教文学全集』(教文館)に収録された作家は、近代日本文学の中心的作家のかなりの部分を占める。とくに、近代日本文学への聖書の影響は顕著である。

旧約聖書の近代詩への影響としては、湯浅半月の『十二の石塚』(1885.10。新島襄の感化を受け、1877年から八年間同志社に学ぶ。近代最初の個人詩集。ヨシュア記第四章と士師記第三章12-30節を題材とした物語詩。五七調を基本として書かれ、古典的な和歌のイメージや『平家物語』の文体や挿話を取り込まれている。聖書に基づいた日本の叙事詩)、島崎藤村の『若菜集』『一葉舟』、北原白秋の『邪宗門』(1909.3)など。

『女学雑誌』(明治18年7月~34年3月。巖本善治、1863年兵庫県生まれ、伝道者でキリスト教系ジャーナリスト)や『文学界』といった雑誌に関わり合った作家には、北村透谷、星野天知、島崎藤村などキリスト者が多く、封建的な因習からの解放やフェミニズム

などの主張にキリスト教の影響が見られる。

そのほか、夏目漱石、有島武郎、芥川龍之介、太宰治らは、聖書から罪の問題を大きく取り込んだ。芥川は「西方の人」、太宰は「駆け込み訴へ」、武者小路実篤は「耶蘇」で自分のイエス像を作品化しているが、それは、聖書的キリスト教的な救済者ではないものの、彼らの聖書への取り組みは真摯であると言えよう。

<文献>

T．イーグルトン 『文学とは何か』岩波書店

安本敏隆・吉海直人・杉野徹編 『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社